

日本気象学会 2016 年度秋季大会 出展・協賛企業・団体等一覧

今大会の開催にあたり、以下の企業・団体からご出展・ご協賛・ご協力を頂きました（2016年9月9日現在；50音順）。厚く御礼申し上げます。（*は会場内に併設されるブースにて展示を行う予定の企業・団体です。）

株式会社朝倉書店

英弘精機株式会社

キーテクノ株式会社

サイバネットシステム株式会社*

株式会社 三弘*

全日本空輸株式会社

株式会社日本エレクトリック・インスルメント

一般財団法人 日本気象協会*

日本無線株式会社

株式会社ニューテック*

三菱電機株式会社*

明星電気株式会社*

日本気象学会 2016 年度秋季大会

会期：2016年10月26日（水）～28日（金）

会場：名古屋大学東山キャンパス 〒464-8601 名古屋市千種区不老町 <http://www.nagoya-u.ac.jp/>

大会実行委員会担当機関：名古屋地方気象台，名古屋大学，三重大学，信州大学，日本気象協会中部支社，
日本気象予報士会東海支部

大会委員長：長谷川 洋平（名古屋地方気象台）

当日の会場への連絡先：大会実行委員会事務局

TEL：090-5102-6410（大会期間中のみ有効）

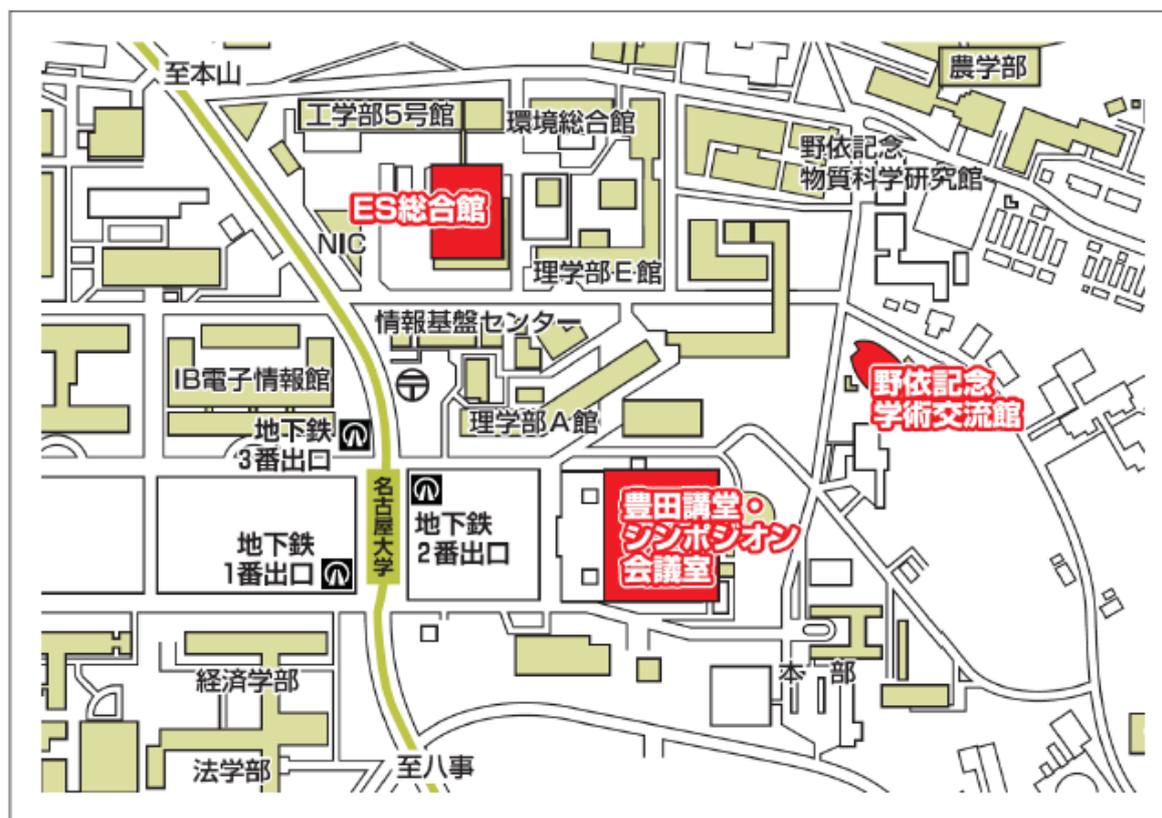
取り次ぎ等はいたしませんのでご了承ください。

交通案内：

- 1) 中部国際空港（セントレア）から名古屋大学まで
「中部国際空港駅」から「金山駅」まで名古屋鉄道（名鉄）で約30分（特急利用時）（運賃810円）。
「金山駅」から名古屋市営地下鉄（以下，地下鉄）名城線左回りに乗り換え，「名古屋大学駅」まで約20分（運賃270円）。
- 2) JR名古屋駅から名古屋大学まで
「名古屋駅」から「本山駅」まで地下鉄東山線で約15分。「本山駅」で地下鉄名城線右回りに乗り換え，「名古屋大学駅」まで2分（運賃270円）。
- 3) 県営名古屋空港から名古屋大学まで
空港から「名鉄西春駅」まで名鉄バスで約20分（運賃340円）。「名鉄西春駅」から「上小田井駅」まで名鉄犬山線で約3分。「上小田井駅」で地下鉄鶴舞線に乗り換え，「八事駅」まで約30分。
「八事駅」で地下鉄名城線左回りに乗り換え，「名古屋大学駅」まで約4分（名鉄西春駅から名古屋大学駅までの運賃470円）。

なお，大学周辺に駐車場はありませんので，公共交通機関をご利用ください。

会場案内図



大会行事予定

A 会場 : 豊田講堂ホール
 B 会場 : 豊田講堂シンポジオン会議室
 C 会場 : 野依記念学術交流館 2 階カンファレンスホール
 D 会場 : ES 総合館 ES ホール
 ポスター会場 : 野依記念学術交流館 1 階

シンポジウム・授賞式会場 : 豊田講堂ホール
 受付 : 豊田講堂 1 階ロビー
 大会事務局 : 豊田講堂 3 階 第 3 会議室
 懇親会 : 豊田講堂 1 階アトリウム

() 内は講演数と講演番号

		A 会場	B 会場	C 会場	D 会場
10月26日 (水)	09:30～ 12:30	降水システム I (15, A101～A115)	スペシャル・セッション 「衛星観測データの新しい解析手法による雲・降水過程の理解深化と数値モデル検証」 (14, B101～B114)	スペシャル・セッション 「気象予測・観測技術の再生可能エネルギー分野への応用」 (13, C101～C113)	スペシャル・セッション 「海大陸における大気・海洋・陸面マルチスケール相互作用研究—国際集中観測 YMC に向けて—」 (13, D101～D113)
	13:30～ 17:00	降水システム II (18, A151～A168)	データ同化 (18, B151～B168)	大気境界層 (14, C151～C164)	大気放射 (8, D151～D158) 大気力学 (9, D159～D167)
	17:00～ 18:00	ポスター・セッション (97, P101～P197)			
10月27日 (木)	09:15～ 12:00	気候システム I (13, A201～A213)	気象予報 (5, B201～B205) 気象教育 (6, B206～B211)	スペシャル・セッション 「気候形成の統合的理解—気候科学における基礎研究の推進と地学・地理教育との連携—」 (13, C201～C213)	スペシャル・セッション 「あかつきが拓く惑星気象学」 (12, D201～D212)
	13:00～ 15:30	シンポジウム「航空機が気象学にもたらす科学イノベーション」司会：坪木 和久 基調講演：小池 真, 村上 正隆, 山口 宗彦, 浦塚 清峰			
	15:45～ 16:15	堀内賞・正野賞・山本賞・奨励賞授与			
	16:15～ 18:15	堀内賞・正野賞・山本賞受賞記念講演			
	18:20～ 20:20	懇親会			
10月28日 (金)	09:15～ 11:30	気候システム II (12, A301～A312)	物質循環 I (11, B301～B311)	観測手法 (12, C301～C312)	中高緯度大気 (7, D301～D307) 中層大気 (5, D308～D312)
	11:30～ 12:30	ポスター・セッション (97, P301～P397)			
	13:30～ 17:00	熱帯大気・台風 (16, A351～A366)	物質循環 II (18, B351～B368)	スペシャル・セッション 「気象情報の活用および気象講座・気象教育」 (19, C351～C369)	スペシャル・セッション 「気候変動が日本・東アジア域の降水現象の変化に及ぼす影響の理解に向けて」 (18, D351～D368)

発表件数 : 483 件 (一般口頭発表 187, ポスター194, スペシャル・セッション 102)
 口頭発表の講演・質疑時間 : 9 分と 2 分

当大会予稿集に掲載された研究発表の文章・図表を複製あるいは翻訳して利用する場合には、日本気象学会の文書による利用許諾を得た上で出所明示して利用しなければなりません。ただし著作者自身による利用の場合は、利用許諾の申請は不要です。

本プログラムの記載内容に関する問い合わせは、〒305-0052 茨城県つくば市長峰1-1 気象研究所予報研究部内 講演企画委員会 (e-mail: kouenkikaku2016a@mri-jma.go.jp) まで。

大会参加費・懇親会費

大会参加費

- 大会参加費は以下の表の通りです。

大会参加費		
種別	前納	当日
講演者 A	8,000 円	—
講演者 B	5,000 円	—
聴講者	3,000 円	4,000 円

- 講演者の種別：
講演者 A：研究機関・大学に所属する講演者（ただし、学部生・院生は除く）
講演者 B：講演者 A に該当しない講演者
- 講演件数が 2 件の場合も大会参加費は変わりません（講演件数による加算はありません）。
- シンポジウムのみに参加する場合は、参加費は無料です。

懇親会費

- 懇親会費は以下の表の通りです。

懇親会費		
種別	前納	当日
一般	5,000 円	6,000 円
学生	2,500 円	3,000 円

支払方法

- 講演者の参加費の支払い方法は前納のみとなっており、既に受付は締め切られています。
- 懇親会費及び聴講者の参加費を前納する場合は、大会ホームページにて 2016 年 8 月 23 日（火）までにお支払下さい（郵便振替の場合は 2016 年 8 月 16 日（火）まで）。それを過ぎた場合は当日払いとなります。

領収書

- 領収書は参加者本人の名義で、大会当日受付にて名札と一緒に手渡される予定です。
- 名義の変更が必要な場合には再発行が可能ですので、大会当日受付にてお申し出下さい。

その他

- 一旦支払われた参加費・懇親会費は返却いたしません。
- 参加費・懇親会費には会員・非会員の区別はありません。
- 非会員の方も規定の参加費・懇親会費をお支払い頂ければ大会・懇親会に会員と同様に参加することができます。

講演の方法

口頭発表（スペシャル・セッションを含む）

- 一般口頭発表の講演 1 件あたりの持ち時間は 11 分（講演 9 分・質疑 2 分）です。
- スペシャル・セッションの発表時間については世話人からの指示に従ってください。
- 講演には PC プロジェクターを使用できます。
- 講演にあたり、予め以下の点をご了承ください。
 - ✓ パソコンは各自で準備して下さい。会場にはプロジェクターおよび接続ケーブルのみを準備します。
 - ✓ セッション開始前の休憩時間などを利用して、必ず接続の確認を行っておいて下さい。また接続が不安な場合は、セッション開始前に会場係に申し出て下さい。
 - ✓ 突然の故障や接続の際のトラブルが発生した場合、座長の判断で発表順の繰り下げなどの対応をとることがあります。携帯用メディアによるバックアップファイルの準備など、トラブルへの備えは講演者自身で行って頂くようにお願いします。

ポスター発表

- 講演者はポスターに表題と著者名を明記して下さい。
- ポスター発表の一人当たり使用可能面積は、縦 160 cm × 横 110 cm 程度となっています。
- ポスターの掲示にはセロハンテープなどのテープ類、フックが使用できません。画鋲等のピンは使用できません。テープ類は会場に用意しますが、発表者が用意していただいても構いません。
- ポスターの掲示可能時間は以下の通りです。会場の都合上時間厳守でお願いします。
 - ✓ 第 1 日の発表者は 10 月 26 日 09:00～20:00
 - ✓ 第 3 日の発表者は 10 月 28 日 09:00～12:30
- ポスター会場での機器の使用は、講演申し込み時に申し出ていたもの以外は原則として認められません。

保育施設の紹介について

大会実行委員会では、大会期間中の保育施設の紹介と、施設利用費用の一部補助を行います。紹介する保育施設と補助金額は下記の通りです。

保育施設：

「トットランド栄」

URL：<http://www.totmate.jp/>

TEL：052-253-5777

補助金額：

保育施設利用料の 3 分の 2 を補助しますが、1 日あたり補助金額の上限は 8,000 円です。また、交通費についても補助を行いますが、上限を 1,000 円とします。

施設を利用される場合は、利用者が直接お申込みのうえ、9 月 30 日（金）までに下記担当者までご連絡下さい。他の施設を利用される場合にも同様の方法で補助を行います。保

育施設の利用を検討されている方は、気軽に担当者にお問い合わせ
合わせください。

連絡先：西尾 伊三男、川嶋 徹（名古屋地方気象台）

E-mail：msj-chubu-2016@netsoc.jp

TEL：052-751-5125

シンポジウム「航空機が気象学にもたらす科学イノベーション」

日時：大会第2日（10月27日〔木〕）13:00～15:30

会場：名古屋大学 豊田講堂ホール（名古屋市千種区不老町）

司会：坪木 和久（名古屋大学 宇宙地球環境研究所）

※シンポジウムの聴講は無料です。一般の方も参加できます。

趣旨

雲やエアロゾル粒子、温室効果気体の観測、台風やメソシステムの観測などさまざまな目的において航空機の重要性は誰もが認めるものである。気象学会は観測専用の航空機を保持することを長い間希望してきた。近年、観測専用の航空機を所有し、新しい気象学の発展を目指す気運が高まりつつある。そのような状況のなかで名古屋大学宇宙地球環境研究所は飛翔体観測推進センターを設置し、国内の航空機観測に貢献することを目指している。名古屋大学は県営名古屋空港が近くであり、航空機観測という点で地の利もある。航空機観測先進国の米国では、台風観測をはじめとする航空機の有効利用が行われてきており、最近では偏波フェーズドアレーレーダを航空機に搭載することが計画されている。台湾では台風の航空機観測が大学を中心とした研究段階から現業段階に入った。韓国や中国も専用の航空機で観測を開始しつつある。そのような国内・国際情勢の中で、気象学会として航空機観測の有用性とそれによる新しい研究の展開について、会員全体さらに学会外も含めて議論・検討する時期に来ている。

名古屋大学は大気圏科学研究所の時代に観測専用の航空機を所有することを目指した時期があった。当時やはり名古屋で行われた気象学会のシンポジウムで航空機観測が取り上げられている。そのときは航空機を所有するまでにはいたらず、これまで国内での航空機観測は個別の研究プロジェクトで行われてきている。それから20年を経て国内外の状況も大きく変わり、再び観測専用の航空機に対する期待と気運が高まりつつある現在、もう一度、専用の航空機を所有し気象学の新しい展開を検討することは、今まさに適時といえる。本シンポジウムでは気象学だけでなく、より広い地球科学における航空機利用の現状とその将来性について議論したい。

プログラム

- 1) 「航空機観測による気候・地球システム科学研究の推進：気象学会の研究計画」
小池 真（東京大学大学院 理学研究科）
- 2) 「雲・降水研究における航空機観測の役割」
村上 正隆（名古屋大学 宇宙地球環境研究所）
- 3) 「航空機観測の熱帯低気圧予測へのインパクト」
山口 宗彦（気象庁 気象研究所）
- 4) 「合成開口レーダによる地球観測において航空機観測に求められること」
浦塚 清峰（国立研究開発法人 情報通信研究機構）
- 5) 総合討論
坪木 和久（名古屋大学 宇宙地球環境研究所）

*各講演時間は、質疑応答を含めて30分です。

スペシャル・セッションの概要紹介

衛星観測データの新しい解析手法による雲・降水過程の理解深化と数値モデル検証

日時：大会第1日（10月26日）09:30～12:30

場所：B会場

趣旨：近年の衛星観測では複数のプラットフォームやセンサ

ーによって雲降水システムの様々な物理量が同時に得られるようになり、衛星観測は従来の物理量の推定から、物理量を組み合わせて素過程を診断できる新しい時代に入ったと言える。特に今年は、雲の鉛直内部構造を観測するCALIPSO/CloudSat衛星が運用10周年を迎えるほか、降雨

の三次元構造をとらえる GPM 主衛星の打ち上げからは 2 年、高時間分解能での計測を可能としたひまわり 8 号の運用開始からは 1 年が経つ歴史的な節目の年でもある。本セッションでは、このように拡充しつつある衛星観測データを縦横に活用して雲・降水過程を調べる新しい解析研究と、それをういた数値モデルのプロセス検証に関する研究発表を広く募集する。これにより、異なる衛星ミッションにまたがるコミュニティ間の情報交換を図り、雲・降水過程の理解を進めるための衛星観測とモデリングの連携を促進したい。

世話人：鈴木健太郎（東大気海洋研）、増永浩彦（名大宇宙地球研）、端野典平（九大応力研）

気象予測・観測技術の再生可能エネルギー分野への応用

日時：大会第 1 日（10 月 26 日）09:30～12:30

場所：C 会場

趣旨：近年、固定価格買取制度（FIT）の導入以降、太陽光発電や風力発電システムなどの再生可能エネルギーの導入量には目覚ましいものがあります。一方、これらの発電出力は天候等により左右されるため、時間的、空間的にも大きく変動します。このため、再生可能エネルギーを含めた電力の安定供給、電力の需給バランスの安定化には、太陽光や風力の予測、把握技術は不可欠な技術要素となりつつあります。また、気象の分野で技術開発された様々な予測・観測技術を用いることは、電力システムの運用コスト削減に貢献し、系統安定性へ大きく寄与できる可能性を秘めています。

このセッションでは、気象予測や気象観測技術が電力システム分野においてどのように利用、応用され有効に活用されていくのか、その議論の場にしたいと思います。研究機関から民間の気象会社、電力システム分野など様々な角度からのご発表、意見交換を期待致します。

世話人：大竹秀明、宇野史睦（産業技術総合研究所太陽光発電研究センター）、嶋田進（産業技術総合研究所再生可能エネルギー研究センター）、宇田川佑介（構造計画研究所／東京大学生産技術研究所エネルギー工学連携研究センター）、中島孝（東海大学情報理工学部）、滝谷克幸（日本気象協会）、早崎宣之（伊藤忠テクノソリューションズ株式会社）

海大陸における大気・海洋・陸面マルチスケール相互作用研究—国際集中観測 YMC に向けて—

日時：大会第 1 日（10 月 26 日）09:30～12:30

場所：D 会場

趣旨：インド洋から太平洋にかけての暖水プール域に広がる「海大陸」はウォーカー循環、ハドレー循環の上昇流域にあたり、この地域の降水とそれに伴う加熱は、全球の気候システムを理解する上で重要な要素の 1 つである。海大陸では、沿岸部の海陸風、季節内周期で発現する MJO、両半球からの季節風、数年おきに発生する IOD 等の様々な時間スケールの現象が絡み合いながら降水活動に影響を与えている。同地域の独自性・重要性は国際的にも広く認識されており、海大陸の気象・気候システムを明らかにする試み“Years of the Maritime Continent (YMC)”が、2017-

19 年に計画されている。本セッションでは、海大陸の大気・海洋・陸面における様々な現象とその相互作用研究の現状を整理すると共に、国際集中観測 YMC に向けた課題について議論する。また多角的な理解のため、比較対象となる他地域の研究も歓迎する。

世話人：安永数明（富山大学）、竹見哲也（京都大学）、米山邦夫（海洋研究開発機構）、鈴木賢士（山口大学）、増永浩彦（名古屋大学）

気候形成の統合的理解—気候科学における基礎研究の推進と地学・地理教育との連携—

日時：大会第 2 日（10 月 27 日）09:15～12:00

場所：C 会場

趣旨：近年の気候システム研究の発展はめざましく、大規模計算機や各種の先端的研究によって、温暖化予測を含む気候の変動機構に関して、様々な知見が得られている。本セッションでは、これらの知見を気候形成論の統合的理解に援用することで、地理的な気候諸現象に対して、気候力学・海洋力学の視点から、これまでに提唱された各種の仮説を再検討する。大学教養課程や高校の地学・地理の基礎教育を含め、広く気候科学の最新知識を社会還元するコミュニティの形成を目指す端緒を開きたく、気象学会だけではなく、地理学会、海洋学会などの隣接諸学会でも活躍する研究者の積極的な参加を期待したい。

世話人：植田宏昭（筑波大生命環境）、立花義裕（三重大生物資源）、松本淳（首都大学東京）、三寺史夫（北大低温研）、野沢徹（岡山大自然科学）

あかつきが拓く惑星気象学

日時：大会第 2 日（10 月 27 日）09:15～12:00

場所：D 会場

趣旨：日本の金星気象衛星「あかつき」が昨年の 12 月に金星周回軌道へ投入されました。いろいろな波長のカメラによる撮像を中心に、金星大気大循環の解明に向けた観測が行われつつあります。様々な高度での雲模様の変化や、それから推定される風速分布などから、大気スーパーローテーションの実態だけでなく、その維持メカニズムに深く関係していると考えられる、平均子午面循環や大気波動・大気擾乱に関する情報が得られるものと期待されます。同時に、金星以外の惑星に関しても、近年は活発な理論的・観測的研究が展開されつつあります。

本セッションでは、あかつきの初期成果を中心に、惑星大気全般に関する研究を広く募集し、最新の惑星大気科学の成果について議論したいと思います。惑星大気に従来から興味をお持ちの方は勿論、あかつきの成功を機に、惑星大気に関心を持たれた方の参加を歓迎します。

世話人：高木征弘（京都産業大学理学部）、今村剛（JAXA 宇宙科学研究所）、高橋芳幸（神戸大学大学院理学研究科）、中島健介（九州大学大学院理学研究院）、松田佳久（東京学芸大学自然科学系）

気象情報の活用および気象講座・気象教育

日時：大会第 3 日（10 月 28 日）13:30～17:00

場所：C 会場

趣旨：昨年の「平成 27 年 9 月関東・東北豪雨」、一昨年の

「平成26年8月豪雨」など毎年のように大きな気象災害が発生している。しかしながら残念なことに住民が防災気象情報を正しく理解していないこと、首長からの適切な避難情報が発表されないこともあり、住民の適切な避難行動が執られていないケースもしばしば見受けられる。このため、最近では防災、減災を目的とした気象講座等の開催が多くなっている。また、気象庁では地方自治体に試験的ではあるが、防災目的で気象予報士を派遣する動きもでてくる。また、教育面では、学校教育においても自然を理解し防災面で重要性が高まっており、地学等の科目を見直すべきだとの論議もされるようになってきた。このようなことから、防災の研究成果の発表、防災啓発や防災教育などについての方向性の議論とともに、気象予報士の役割等の論議をしたいと考える。

世話人：岩田修、岡田登志恵、鈴木浩文、関谷不二夫、榎野泰夫、與語基宏、水谷俊雄、荒川知子（日本気象予報士会）

気候変動が日本・東アジア域の降水現象の変化に及ぼす影響の理解に向けて

日時：大会第3日（10月28日）13:30～17:00
場所：D会場

趣旨：地球温暖化に伴い、気温はほぼ全球で上昇するが降水は地域差のある複雑な変化をすると指摘されている。特に、日本・東アジア域は、ユーラシア大陸と太平洋との境に位置し、気象は、大陸と海洋、中緯度と熱帯の多方面からの影響を受けるため、気候変化に対する応答が複雑で敏感な可能性がある。近年の日本では、2014年2月に南岸低気圧が甲府に前代未聞の大雪を、8月には多雨域でない広島での豪雨が甚大な被害をもたらした。このような現象は気候変化と係っているのだろうか。本セッションでは、気候変動に伴う大循環の変化と日本・東アジア域での降水変化との関係についての理解を深めるために研究成果を持ち寄り議論する。気候モデル実験、最新の気象・衛星観測、水同位体比、全球雲解像モデル出力データ等を利用した研究、海洋、成層圏、北極圏、対流圏上部を含めた大循環の変化が東アジア域の降水に及ぼす影響のメカニズム研究などの投稿を歓迎する。

世話人：高菽縁（東京大学大気海洋研究所）、尾瀬智昭（気象庁気象研究所）、中村尚（東京大学先端科学技術研究センター）

研究会のお知らせ

大会期間中とその前後に以下の研究会が予定されています。興味のある方はご自由にご参加下さい。

第46回メソ気象研究会

日時：2016年10月25日（火）大会前日 13:30～17:30

場所：B会場（豊田講堂 シンポジウム会議室）

コンピーナー：金田幸恵（名古屋大学宇宙地球環境研究所）

テーマ：「擬似温暖化実験のメソ気象研究に対する可能性」

内容：近年、集中豪雨や台風といった極端気象現象に対する地球温暖化の影響がしばしば取り上げられています。たとえば、2013年11月にフィリピンを襲い甚大な被害をもたらした台風Haiyanは、はたして温暖化の影響を受けていたのでしょうか。また、もし仮にHaiyanのような台風が、温暖化が進んだ21世紀末に現れたとしたら、どのような台風になってどのような被害をもたらさうのでしょうか。

このような特定の気象現象の将来変化研究に取り組む手法の一つとして「擬似温暖化実験」が挙げられます。擬似温暖化実験は、再現実験と温暖化実験の一組の実験から成り立ちます。再現実験では再解析データ等を境界値に現象を再現します。次に温暖化実験では、この再解析データ等に全球気候予測実験等から取り出した差分を足し合わせます。昨今、海外でもHurricane Katrina (2005)、Sandy (2012)といった熱帯低気圧をはじめ、竜巻、洪水、winter storm等、さまざまな気象現象に対して、この手法が用いられています。

本手法は、温暖化に限らず、過去や将来のさまざまな気候変動に対するメソ気象現象の応答を調査する上で活用できるかもしれません。その可能性と限界について活発な議論をお願いします。

プログラム：

13:30-13:40 開会挨拶

13:40-14:10「レビュー：擬似温暖化実験」（発表20分+質疑10分）木村 富士男（筑波大学）

～第一部：台風への適用～

14:10-14:50「擬似温暖化実験による伊勢湾台風の将来変化」（発表30分+質疑10分）金田 幸恵（名古屋大学宇宙地球環境研究所）

14:50-15:30「台風強度に関する擬似温暖化実験」（発表30分+質疑10分）吉野 純（岐阜大学）

休憩

～第二部：応用 メソ気象学における可能性～

15:45-16:25「Conditional event attribution (Typhoon Haiyan)」（発表30分+質疑10分）高菽 出（気象研究所）

16:25-17:05「過去の地域気候変化に対する下部境界条件の寄与」（発表30分+質疑10分）佐藤 友徳（北海道大学）

17:05-17:30 総合討論：擬似温暖化実験の可能性と限界

世話人：坪木和久（名大地球水循環）、加藤輝之（気象研究所）、小倉義光（東大大気海洋研）

連絡先：坪木和久（名古屋大学地球水循環研究センター）

E-mail：tsuboki@nagoya-u.jp

極域・寒冷域研究連絡会

日時：2016年10月26日（水）（大会第1日）セッション終了後2時間程度

場所：D会場（ES総合館ESホール）

テーマ：「南極域におけるエアロゾル研究の現状と今後」

趣旨：南極域のエアロゾル研究は、大気中の物質動態だ

けではなく、雪氷表面で起こる極域特有の物質循環過程も解明してきました。それに加えて、例えば、アイスコアの分析において氷期・間氷期のサイクルで現れる化学成分の濃度変動を理解するためには、少なくとも南極大陸・南大洋規模の物質輸送や大気と雪氷表面層の間の物質交換のメカニズムを知っていかなければなりません。エアロゾルの性質や分布は雲生成を通して南極の水循環に影響を与え、更に将来的には日射吸収量の変化をもたらす可能性が提示されてきました。今回は、いくつかの代表的な地域での観測結果に基づいて南極域の沿岸域から内陸の物質分布や季節変化に関する大局的特徴を確認し、それらをもたらすメカニズムの解明に期待される全球大気化学モデルの解析、及び南極氷床表面積雪層の物質の堆積状態の時間変化について議論します。以下の3名の方々の講演を計画しています。学会員からの講演の追加も期待しておりますので、ご希望の方は下記連絡担当者またはお近くの極寒連関係者にお声掛けください。

プログラム：

1. 「趣旨説明」
2. 「南極大気中のエアロゾルなどの大気微量成分の物質循環」
原 圭一郎（福岡大学）
3. 「モデルから見える南極への長距離輸送」
須藤健悟（名古屋大学）
4. 「雪氷面への物質沈着、表層のプロファイルの形成機構」
保科 優（国立環境研究所）

連絡先：當房 豊（国立極地研究所）

E-mail : tobo.yutaka@nipr.ac.jp

統合的陸域圏研究連絡会

日時：2016年10月26日（水）（大会第1日）セッション終

了後2時間程度

場所：C会場（野依記念学術交流館カンファレンスホール）

テーマ：「土壌からの温室効果ガス排出とそのメカニズム」

内容：土壌は直接あるいは植生を介して大気とさまざまな物質を交換している。このうち、土壌から大気へ放出されるものの中には CO_2 や N_2O などの主要な温室効果ガス（GHGs）が含まれており、気候に大きな影響を与えている。そこで、今回の研究会では、土壌からの CO_2 放出とそれに対する土壌微生物の寄与、ならびに窒素肥料利用を考慮した NH_3 、 NO 、 N_2O 放出量推定についてご講演を頂き、土壌から大気への GHG 放出とそのメカニズムについて議論したいと考える。（タイトルや講演者は変更になる場合があります）

プログラム：

- 1) 陸域土壌から放出される二酸化炭素量のグローバルの推定（仮）
橋本昌司（森林総研）
- 2) 陸域生態系における土壌呼吸と土壌微生物群集
吉竹晋平（岐阜大）
- 3) 窒素形態を考慮した全球窒素肥料マップの開発と VISIT モデルによる陸域 NH_3 ・ NO ・ N_2O ガス放出の推定
仁科一哉（環境研）
- 4) 総合討論

世話人：伊勢武史（京大）、市井和仁（JAMSTEC）、大石龍太（極地研/東大 AORI）、熊谷朝臣（名大）、近藤雅征（JAMSTEC）、佐藤 永（JAMSTEC）、立入 郁（JAMSTEC）、羽島知洋（JAMSTEC）

連絡先：立入 郁（JAMSTEC）

E-mail : tachiiri@jamstec.go.jp

2017 年度春季大会の予告

2017 年度春季大会は、2017 年 5 月 25 日（木）～28 日（日）に国立オリンピック記念青少年総合センターで開催される予定です。大会告示は「天気」12月号に掲載予定です。なお、春季大会の講演申し込み締め切りは2017年2月頃となる予定です。